



3年分のラオス語貼付絵本が、ALCの現地事務所兼図書館に到着。右のスタッフが持つメッセージには「大変ありがとうございます。2024年9月9日 ALCスタッフより」と書かれています。(P6～7)

写真提供:ALC

特定非営利活動法人 地球の木

2024年度年次報告書

(2024/4/1 ~ 2025/3/31)



Annual
Report
2024

VISION — 地球の木が目指す社会

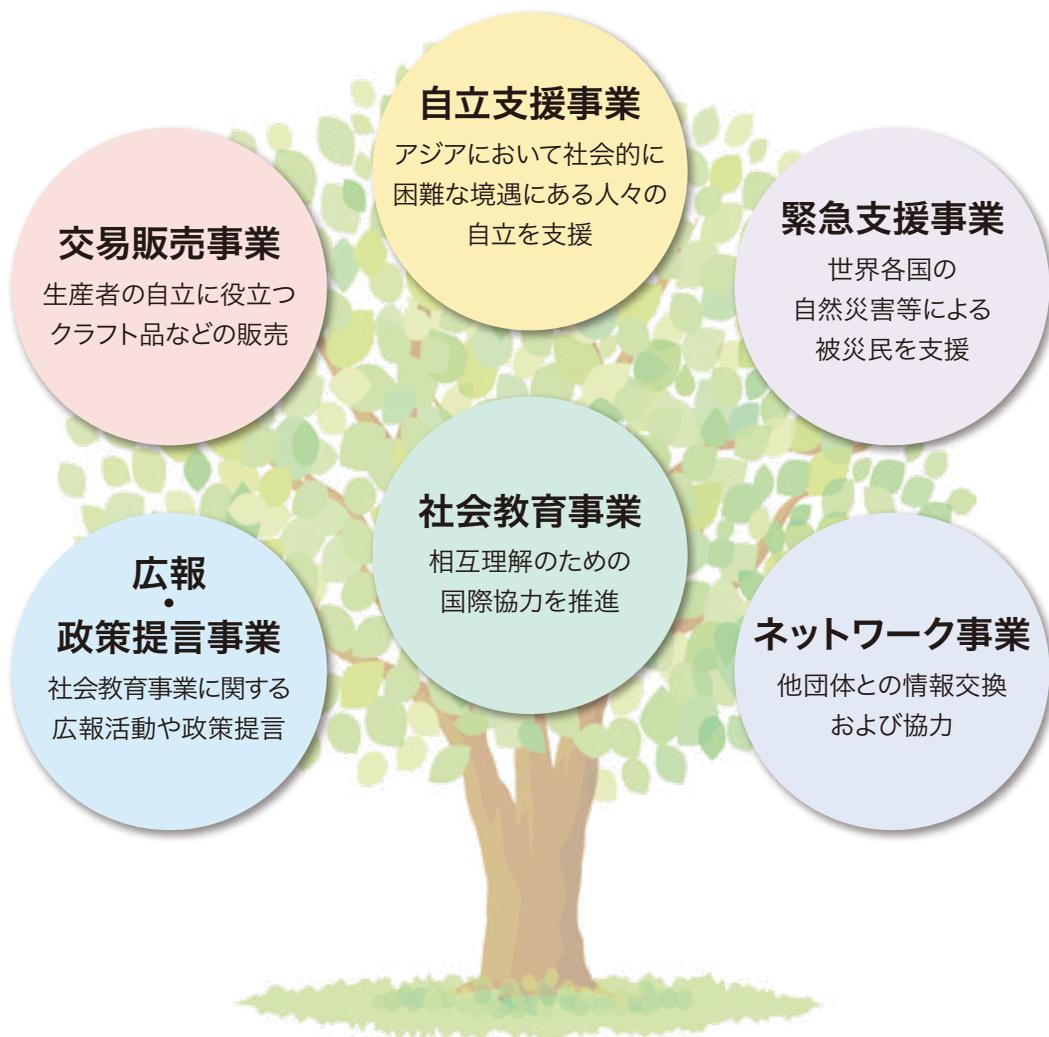
地球上すべての人々が、自然と共存し、一人ひとりの人格や固有の文化を尊重し人が人らしくあたりまえに生きていくために、互いに助け合う社会をめざします。

MISSION — 地球の木の使命

地球の木は、主にアジアの国々で、社会的に弱い立場におかれた人たちが、自らの権利を知り、未来を自分たちの力で切り開いていけるように、教育や地域づくりのあり方を共に考え、対等な立場で必要な支援をおこないます。

同時に私たちは、国内においても、多様な人々や市民団体と連携し、真の豊かさを育む教育活動や多文化共生の社会づくりに携わります。

地球の木の活動



■2024年度事業の概要

2024年度は、自立支援事業でネパールとラオスの3つのプログラムを行いました。3年間取り組んできたラオス図書プログラムが2024年度をもって終了しました。多くの方々から絵本の寄付、翻訳貼付活動へのボランティア参加、絵本をラオスへ届けるための送料の寄付など、さまざまな形でご協力いただきました。

もう一つのラオスプログラム、JVC(日本国際ボランティアセンター)の「森や川など共有資源の村人による管理・利用のためのプログラム」の支援は、3年間10村での支援期間が終了しました。新しい地域で行われる支援について検討し、1年間の継続を決めました。

ネパールの「インドラサロワール農村自治体で教育の質を高めるためのプログラム」では「質の高い教育」が同自治体の全区に広がり、教師へのカウンセリングトレーニングや保護者への教育キャンペーンなど様々な取り組みもなされました。9月にあった大洪水で、支援地が大きな被害に遇いましたが、緊急支援の呼びかけに多くの寄付が集まり、現地に届けることができました。

また、これから地球の木が何をしていくのか検討するために、これからの3年間の目標や計画を話し合い、3か年計画として立案しました。

■3か年計画(2025年度～2027年度)

地球の木は設立から34年、アジアの子どもや女性、少数民族が困難を乗り越え、自立して生きるためのプログラムを支援してきました。これからもよりよい地域社会、国、世界を作っていくためには、何をしていけばよいか、どのような組織にしていく必要があるのか。これからの地球の木の役割があると考え、3か年計画づくりに取り組みました。基本的なコンセプトは、以下の2つです。

- 多様な人々が共存しそれぞれが尊重され、差別のない、公正な社会をめざした活動を行う。
- 相互理解を進めるためのコミュニケーションを活発におこない、風通しの良い組織にする。

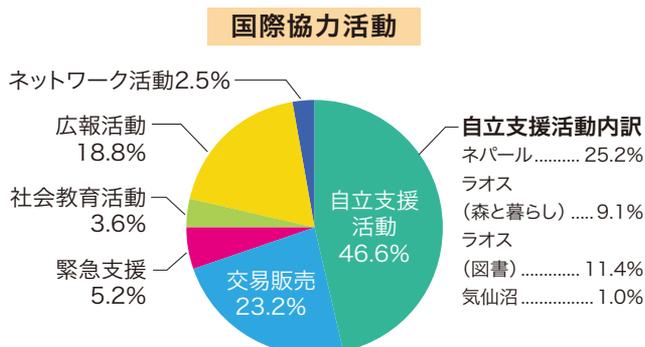
時代の変化に対応した市民の国際協力活動を創造し、自立した市民の新しい生き方につながるように活動していきます。

■2024年度収支報告

総収入	
会費	2,874,000円
寄付	2,360,801円
物品の寄付	1,105,090円
事業収益 ※1	1,511,171円
その他収益 ※2	39,395円
合計	7,798,732円

総支出	
国際協力活動	7,764,296円
管理運営	4,558,218円
合計	12,322,514円

国際協力活動	
自立支援活動	3,621,540円
取引販売	1,803,187円
緊急支援	403,879円
社会教育活動	279,842円
広報活動	1,459,202円
ネットワーク活動	196,646円
合計	7,764,296円



※1 クラフト販売、出前講座などの収入
※2 会費引落手数料、利息などの収入
より詳しい決算資料はホームページで公開しています。



コミュニティー林に看板を設置する村人(タテン郡トゥムニョー村)

共有資源を守り、安定した暮らしを目指す

ラオス

現地パートナーNGO

JVC (NPO法人日本国際ボランティアセンター)

1980年の設立以来、アジア、アフリカ、中東で上下や貧富を作る社会構造そのものを変えるため、現地の人と活動している。



地球の木は、JVCがラオスの農村で行っている「自然資源を保全し、住民主権を尊重した活動」を支援しています。その根本にある「資源を奪い合うのではなく分かち合う」という理念に共鳴するからです。私たちは、JVCラオスの現地活動を知り、それを伝えると共に、ラオスの農村の暮らしから見えてくる課題を広く発信します。そして、地球市民として自然という共有財産(コモンズ)をどのように守っていけばいいのか、我々の暮らしのあり方とつなげて考えていく活動をしていきます。(写真はJVC提供)



JVCラオスの現地活動

人口の6割以上が、農村部で自然に依拠した自給的な暮らしを営むラオス。活動地のセコン県は最貧困県の一つであり、自然が豊かに残る一方、近年は水力発電や企業による大規模プランテーションなどの開発事業が進んでいます。また目の前の生活の必要から、住民がキャッサバやコーヒーなどの換金作物を栽培することで、いつの間にか共有の森や土地を失うなどの問題を抱えています。

JVCは、セコン県のラマーム郡とタテン郡の10村を対象に、住民が暮らしの基盤である共有資源を外部者から守り持続的に管理し利用していきけるよう、その仕組み作りなどに村人と共に取り組んできました。2022年8月から2025年3月まで行ったこのプロジェクトは、想定した成果を概ね達成し終了、その後は同県ダクチェン郡・カルム郡の村に活動地を移し、引き続き同様の活動を村人と一緒に広げていきます。



村の基礎情報をまとめた冊子について話し合う様子(タテン郡チュンフンヌア村)



土壌改良、管理のためのキャッサバとラッカセイを混作した畑(ラマーム郡フン村)

■自分たちの村を知り、共有資源の価値を確認し合う

2村で村人と共に基礎情報(人口・歴史・生産物・村境など)および直面している開発問題についての情報を収集し、4村について冊子や資料としてまとめ、村人に共有。これにより対象村10村全てで基礎情報の収集およびその結果の共有を完了。この過程で話し合いを行い、共有資源が食糧や収入の源としての価値を持っていること、またそれが減少していることを村人と共に確認しました。

■共有資源を持続的に管理し利用するための仕組み作り

2村で魚保護地区やコミュニティ林を導入。JVCは規則や地図策定をサポートし、それらを示す看板を設置、近隣の村民や行政官を交えた式典も行いました。5村では農薬や化学肥料などによる環境への負荷や地質劣化の減少・防止を推進するグループを設置。4村では10回にわたり、土壌改良のために混作する落花生や大豆の配布及び播種を行いました。また、自然農薬づくりの研修を2村に対し行いました。これらの活動は、村人自身の手によってその後も継続されていることが確認されています。そして、コミュニティ林や魚保護区の設定が、村の自治力向上や将来世代への資源確保に寄与していることが、その後の村人からの聞き取りから確認されました。

■自然資源に対する住民の権利について学ぶ法律研修

6村で村人向けの法律研修を6回実施。延べ121人(女性38人)の参加を得ました。これにより対象10村全てで少なくとも1回の法律研修を完了。法律研修に参加した村の自治会役員が、理解度テストで7割ほど研修内容について理解度を示しました。

■提言活動 中央、県、郡政府機関との会合で、JVCがまとめた共有資源管理の活動のガイドラインを配布し、良い実践例として説明、共有しました。



コミュニティ林に看板を設置する村人(ラマーム郡ナンヨン村)



たい肥づくり研修



新規プロジェクト候補地の調査に際し、法律カレンダーを受け取る村人とJVCスタッフ

地球の木の活動(国内)

- ▲JVCとの共催で講演会「奪われない暮らしと行き過ぎた資本主義～8年間の駐在で見えてきたこと～」を開催した(8月)。幅広い世代から26名の参加があり、社会問題について前向きな意見が寄せられた。講師のJVC山室良平さんは、2024年4月に帰国、後任に東(ひがし)武瑠さんがラオス現地事務所代表に着任した。
- ▲JVCの後藤さん、山室さんから2023年度のラオスプロジェクト報告を受けた(4月)
- ▲JVCの山室さんから2024年度のラオスプロジェクトの報告を受けた(3月)

ラオスコffee事情

ラオスの日本への輸出品の第1位はコーヒー豆。またラオスの全輸出品の内、コーヒーが占める割合は42%にもなるそうです。日本に輸入されたコーヒー豆はどこに?

フランスの植民地時代にラオスで始まったコーヒー栽培、それが本格的になったのは1915年とされています。1949年に大霜害と錆病が蔓延したことで、ラオスで栽培されるコーヒーの原木が、病害虫に強く比較的平地でも栽培可能とされるロブスタ種へと変更されます。ロブスタ種は苦みが強くコクは薄いけれど収穫量が多いので、世界的にはインスタントコーヒーや缶コーヒーの原料として使われています。日本も同じで、加工品として使われることでラオス産とは知らずに私たちはその恩恵に与っていたようです。

近年では政府もコーヒー生産に力を入れ始め、海外からの栽培指導や機材支援を受け入れるようになってきています。また世界的なコーヒー需要の高まりがラオスコffeeの生産を後押しする結果となっています。その量は年々増え続け、現在では年間生産量17万トン、生産国ランキング14位となり、今後もシェア拡大が期待されます。

(郷堀卓司「ラオスコffeeはいかが!!」

JVCラオスのボランティアチーム『ラオスの暮らし』35号より抜粋)

コンビニで売られているコーヒーにもラオス産豆が使われているようです





ボランティア活動でラオス語翻訳を貼付した絵本が子どもたちのもとに届きました(写真提供: ALC)

本と出会い、自分の世界を広げよう!

ラオス

現地パートナーNGO

NPO法人ラオスのこども(ALC)

ラオスの子どもたちの教育環境の向上を願い、1982年より日本およびラオスで活動する国際協力NGO。子どもが自らの力を伸ばす権利、人生を主体的に選



択する権利を全うできるよう、教育の普及に協力し、公正で平和な地球社会づくりへの貢献を目的とする。

ラオスでは図書館や本屋がとても少なく、ラオス語の本に触れる機会も限られています。学校教育は公用語のラオス語で行われ、毎学年末に行われる進級試験にも関わるため、子どもたちはラオス語の習得が欠かせません。ラオスは約50の民族が暮らす多民族国家で、とりわけ、母語が異なる少数民族の子どもたちは、小学1年からラオス語の読み書きを求められ、高い留年率につながっています。

本プログラムでは、図書環境の改善を通して「本に親しみ、学ぶ力を育て、未来を選ぶ力を身につける」ことを目指し、2022年度から2024年度まで活動を行いました。

地球の木の皆さま

3年間の「ラオスのこども」へのご支援、ありがとうございました。私たちは、ラオスの子どもたちに本を読む楽しさを知って欲しいと思い、40年にわたり、ラオス語図書の出版や学校に図書室を作り、教育環境改善のお手伝いをしてきました。望ましいことに、近年、さまざまな機関の継続的な働きが実を結び、環境は徐々に改善されています。しかし、改善はどちらかというと学校建設などハード面が先行し、授業内容の向上など成果が見えにくいソフト面はまだだと感じます。

ラオスで中学生もスマートフォンを持つ時代となり、紙の本の出版や図書館を整備する意味があるのか?と問いかげられることがあります。私たちはこれに対し、学びの最初の段階では、目で活字を追い、頭の中にイメージを組み立て、繋げていく能力を育てることが、何よりも大切なことと考えます。

読書推進活動というと地味な活動ですが、今回、同じ志をもつNGO仲間として「地球の木」の皆さまからご支援をいただけたこと、とても心強く励まされました。直ぐにゴールが見えるものではありませんが、ご支援をいただきましたことは、ラオスの子どもたちにとって、価値があるものと確信しています。ありがとうございました。



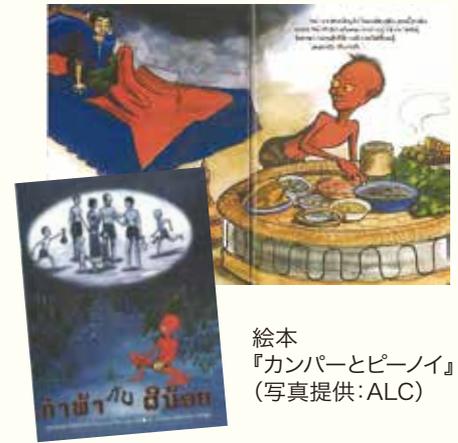
チャンタソン・インタヴォンさん
ラオスのこども(ALC)代表

ラオスから国費留学生として来日。日本で出会った絵本と教育の大切さを母国にも広げたいと、1982年に日本で仲間と「ラオスのこども」を設立。ラオス全土で図書室を356か所開設し、ラオス語図書を95万冊出版するなど、図書を通じた教育支援を続ける。

活動概要

■ 現地活動

NPO法人「ラオスのこども」(以下ALC)が行ったラオスの人気絵本『カンパーとピーノイ(孤児と小さいお化け)』の出版について、3,000冊分の印刷費を支援しました。この本はラオスの昔話を絵本化したもので、図書室活動や中学校の授業でも活用されています。より多くの教育現場で使ってもらえるよう、教育科学研究所(RIES)の教材リストにも登録されました。※教育科学研究所 RIESはラオス教育スポーツ省の研究機関で、カリキュラムや教科書の作成、教員向けの研修を行っています。



絵本
『カンパーとピーノイ』
(写真提供: ALC)

■ 国内活動

2022年度から行っている絵本のラオス語翻訳貼付活動のまとめとして、ご寄付いただいた貼付、補修活動を行ったほか、絵本の運搬費のご寄付を募り、すべての絵本をラオスに届けました。また、ラオスを知り、楽しむ夏休みイベント、3年間の活動報告書の作成を行いました。

① 貼付活動

2024年度は延べ66名が11回のボランティア活動に参加。未貼付の絵本や新たに寄付いただいた14冊にラオス語の翻訳を貼付し、補修作業も行いました。また、フリースクール「ここだね」の子どもたちと読み聞かせやラオスクイズも実施しました。



再版された『カンパーとピーノイ』綺麗な本になり嬉しそう(写真提供: ALC)

② 夏のイベント

イベント「ラオスの絵本とあそぼう」では、ラオス語の自己紹介や、打楽器を使った絵本の読み聞かせなどを行い、文化を楽しく体験しました。(7/25)

③ 絵本の運搬

コロナ後も船便が再開せず、運搬費のご寄付を募った結果、192,500円のご支援をいただきました。これにより、342冊すべての絵本をALC現地事務所併設の図書館などに届けることができました。



ウクライナ民話の『てぶくる』寄付を沢山いただいた本です(写真提供: ALC)

④ 報告書の作成

3年間の活動をまとめた報告書を作成し、記録に残すのと同時に、ご支援いただいた方々へお届けしました。

■ ご支援いただいた皆さまへ

2022年度からの3年間で、ラオス現地では図書館を活用する教員研修支援や3冊の出版支援を行うことができました。また、国内のラオス語翻訳貼付活動では、342冊の絵本をご寄付いただき、翻訳貼付ボランティア延べ303名、運搬ボランティア12名のご協力をいただきました。ラオスへの絵本の運搬費へのご寄付を含めて、たくさんの皆さまからご寄付もいただき、皆さまと作ってきたプログラムであることを実感しています。

現地の子どもたちの未来を皆さまのご協力と共に支援できましたことを深く感謝いたします。



「ラオスの絵本と遊ぼう」のイベントでは童心に返り読み聞かせを楽しみました



子育てキャンペーンに集まった保護者たち(IRM 5区: マハチュニ中学校、カリデヴィ中学校、マンジュシュリー小学校)

質の高い教育で行動する若者を育てる

ネパール

現地パートナーNGO

SAGUN

土地の文化や伝統を尊重しつつ、人々の持つ潜在能力を引き出すような住民主体の開発をめざす専門家からなるNGO。



人口約3,000万人のネパール。海外への出稼ぎは650万人(2024年)と増加の一途をたどっています。支援地インドラサロワール(以下IRM)でも、家族が海外に行っているという多くの人々に会いました。学校は21校あり、学校に通う子どもは増えていますが、教員の定着率の悪さは相変わらずで、保護者が教育に熱心でないことも積年の課題でした。また、地域でうつ病や自殺者が増えています。就職にも影響する国家試験の成績不振などから、将来に夢を持ってないこともその理由のひとつです。

地球の木とSAGUNは、ロシ地域での15年にわたる「幸せ分かち合いムーブメント」の成功事例に倣い、質の高い教育に特化したプログラムを、初めの一步からIRM教育省と協働して始め、4年目を迎えました。

活動概要

これまでの支援で明確になったことは、IRMにおける教育の基礎が脆弱すぎることでした。そこで今年度は初等教育の改善に重きを置きつつ、中等教育では国家試験のための緊急アクションを取りました。

● 理科への関心が高まる

1区、2区、3区の3つの中学校に加え、今年度は4区、5区の2つの小学校でも、実践的な理科の授業を実施しました。中学校では、専門家による3日間の理論的な授業の後、3日かけてモデル授業と大掛かりなサイエンス・エキシビションの準備をしました。理科の教師がいない中学校では、2日延長して8日間の授業になりました。この企画は、学校や地域社会に衝撃を与えました。生徒たちは積極的に参加し、多くを学び、自信をつけました。3つの中学校で800人が参加し、保護者や学校運営委員会は、SAGUNと地球の木



サイエンス・エキシビションで発表する生徒たち(3区バツアラデヴィ中学校)

の貢献を認めてくれました。これまで理科で落第する生徒たちが多く、生徒たちは理科嫌いでしたが、この授業によって生徒の態度が変わり、理科への関心が高まりました。

●算数教師向け研修

3日間にわたる、小学校の算数教師向け研修には、各校から教師が参加し、子どもに分かりやすい教え方や安価な教材の作り方を学びました。国家試験対策ではこれまでになかった行動に出た学校がありました。専門家による特訓を受けた教師たちが受験生のために合宿を行ったのです。厳しい現状を一朝一夕に打破することは叶いませんでしたが、子どもたちが、苦手科目だった理科と算数を楽しい科目であると感じてくれ、教師たちが効果的な教え方を学んだことは、大きな一歩だったと思います。

●養護教諭らへの研修

自殺やうつ病対策としては、養護教諭、教師等を対象に子どもたちの情緒・行動面における問題に対処するための研修を実施しました。研修を受けたお陰で、パニック発作を起こした生徒に対して、適切に対応することができたという報告も上がっています。

●保護者への教育キャンペーン

IRMでは、親の教育への無関心が子どもたちの成績不振の原因の一つで、長年の課題でした。今年度は新たに、親の教育への意識を高めるため、すべての区で子育て教育キャンペーンを実施することができました。合わせて1,000人を超える保護者が参加し、参加型ワークショップで、親がどのように子どもの教育に貢献できるかを学びました。子どもと親の情緒的・行動的問題への対応に焦点を当てたワークショップは、保護者たちから好評を得ました。IRMの政策立案者、教師、関係者が、新しい教育技術の必要性を理解してくれたことも、子どもたちの未来を拓く改革の一歩となるでしょう。

2024年度は、洪水・地滑り被災者に対する人道的支援もあったため、IRMの役所や村人たちとSAGUN/地球の木の関係がより親密になりました。SAGUNから「私たちはIRMの一員として認められたことを誇りに思います」とのメッセージが来ました。

■国内活動

2024年度は、支援地域を広げるため、前年度の1.5倍の支援金が必要でした。そこで、「ネパール教育募金キャンペーン」を実施したところ、100名以上の方から581,500円のご寄付が寄せられました。

- 2024年2月のモニタリング調査の報告会を7月15日開催し、25名の参加者がありました。
- 2025年1月にはIRMにおける洪水の被害状況や活動の進捗状況を確認するために現地を訪れ、洪水緊急募金を届けました。(詳細は11ページ)
- ネパールネイティブのチームメンバーの協力で、SAGUNが発行している地方情報誌「ロシラハール」を読む会を4回実施。SAGUNの活動や開発のコンセプト、ネパールのことをより深く学ぶことができました。外部者にも声かけしましたが、参加者を得られませんでした。
- 2024年度は、シャルミラさんとニルマラさんが来日され、現行プログラムで知りえなかったネパール事情や二人の活動について学ぶ機会がありました。(詳細は10ページ)
ニルマラさんの24年ぶりの日本滞在がきっかけで、チームから有志3名が極西部を訪れました。(詳細は10ページ)



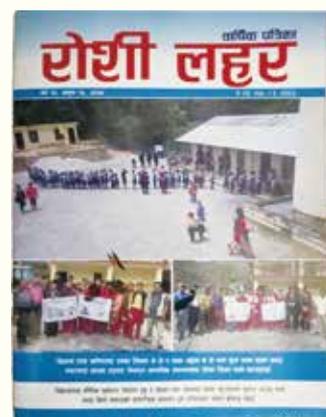
算数のトレーニングに参加した21人の先生たち(2区クレカ)



ストレスマネジメントエクササイズ(4区)



保護者のためのワークショップ(5区のカリカ中学校、シン・バイラブ小学校)



地域情報が満載のロシラハール

■ 極西部訪問

ネパールで最初のプログラムを実施した極西部カイラリ郡を、2025年1月に訪問しました。1997年から2009年まで続いた極西部の教育プログラムは、先住民族タルーの人たちが対象で、識字教室から始め、貯蓄グループづくり、意識改革・野菜栽培・裁縫のトレーニングなど、自立に向けたプログラムを継続しました。その結果、多くのグループができ、協同組合にも発展しました。

支援が終わって16年後の今、その活動が地域の人々にどのような影響を与えているのかを確かめることが訪問の目的でした。当時のリーダーたちが、元識字教室参加者たちと共に笑顔で私たちを歓迎してくれました。訪問したのは、ベラル村、ニムディ村、パハルンプル村、識字教室の生徒から識字教室の先生となったデブラニさんが住むボンカタ村。出会ったのは、自ら仕立屋や食料品店を営む元気な女性たち、青空マーケットで野菜を売る女性たちでした。どの人もきっかけは識字教室でした。デブラニさんは、山羊・豚・鶏・魚を飼育する会社を自ら経営していました。注目すべきは、どの人も自分だけの成功で完結せず、トレーニングを通して次の人たちへと活動を広げていることです。これが地域の発展に寄与しています。

識字から女性たちの世界が広がり、自信に満ちて生きている姿を見て、地球の木海外支援の波及効果を確認することができました。



青空市場で野菜を売る女性たち



タルー・カタリア族の民族衣装を着て

ネパールから訪問者を迎えて

● シャルミラさんおしゃべり会 ～ 私の登山には大義がある～

4月7日(日): かながわ県民センター

地球の木が支援していたマンガルタール村の奨学生シャルミラさんは、エベレストを含む秀峰を踏破し、著名な登山家として活躍しています。富士登山のために来日した機会に地球の木の皆さんに会いたいと訪問してくれました。輝かしい活躍の裏には多くの困難があったようですが、高校を卒業したという誇りが彼女を支えてくれたと涙ながらに語りました。自らロールモデルになってネパールの女性たちを力づけたいと、海外での出稼ぎではなく、地元での収入創出の道としての登山ガイドやホームステイの仕事を女性たちに勧め、支援しています。



元奨学生の登山家シャルミラさん

● ニルマラさんお話し会 ～ 識字教室から女性の自立へ、女性のエンパワーメントは今～

7月15日(月): 横浜市開港記念会館

ネパール極西部の教育支援プロジェクトを12年にわたってリードしたニルマラK.C.さん(元SOARS代表)とは、出会いから30年、ネパールを訪問する度に交流を続けてきました。気候変動会議出席のため来日し、地球の木を訪問してくれました。今も国際NGOアクションエイド・ネパールの理事長として弱者の社会的地位を上げる活動に精力的に関わっています。ネパールの課題、極西部の活動がもたらしたものの、企業やNGOの社会的責任などについて熱く語りました。会場にはニルマラさんと関わったことのある会員など31名が参加し、旧交を温めました。



地球の木事務所にてニルマラさん(中央)と

緊急支援事業

2024年9月末、ネパール全土を襲った集中豪雨により、地滑りと大洪水が発生し、地球の木が支援するIRMと元支援助口シ地域が深刻な被害を受けました。特にIRMではダムの放流情報が伝わらず、生徒6名が命を落とし、ロシでは支援していた小学校舎が壊滅し、バザール(市場)が流失しました。地球の木は緊急募金を呼びかけ、12月末までに40万円余(あまり)が集まりました。それを35万ルピーへ換金し、SAGUNに渡しました。そのうちの10万ルピーはIRMの行政のバスケットファンドへ寄付され、約140世帯に食料、仮設住居、道路修復などの支援が実施されました。皆さまからのご寄付は行政との信頼関係をより堅固なものにしてくれました。IRMよりも被害が甚大であったロシ地域には25万ルピーが充てられ、小学校の土砂撤去と集落保護のための防護壁設置に使われました。住民たちは「幸せ分かち合い」の再来と喜び、きれいになった校舎で学ぶ子どもたちの笑顔が戻りました。



濁流に飲み込まれるバス



IRM市長に支援金を渡す

交易販売事業

クラフト(手工芸)品の生産者の自立を助け、生産者や生産地の情報を伝えるため、クラフト販売を行っています。

■販売

- 生活クラブ生協、福祉クラブ生協の共同購入販売を行いました。
- 地域などのイベントに参加し、販売を行いました。(d-lab、いそご多文化共生ラウンジ、多文化フェア@なかやま、オルタ館フェスタ、かまくら国際交流フェスティバル、東日本大震災復興まつり、JICAライブラリー、みどり国際交流ラウンジ講演会、福祉クラブ生協藤沢センター)
- 生活クラブ生協デポーで展示販売会を7回行いました。(のぼりと、東戸塚、つつじが丘、ほんもく、東寺尾、ひらつか西海岸、鎌倉)
- ことぶき協働センター、WE21ショップほどがや・天王町店の協力で委託販売を行いました。

■クラフト品生産者

●ホアイホンセンター(ラオス)

ラオスの首都ビエンチャンにあるホアイホンセンターは1998年にラオス人女性により設立されました。「貧しい、教育を受けていない、障害があるなどの女性に、織り、染色、仕立てなど、さまざまなスキルレベルのトレーニングを提供すること」「天然染めや伝統織物などラオスの伝統工芸を復活させること」を目指しています。

●シヴィライ村モン族(ラオス)

インドシナ戦争後、難民となり、1993年にシヴィライ村に帰還した女性たちが制作しています。人口200人の村で、女性の半数が農作業の合間にモン族伝統の刺繍を思いを込めて刺しています。

●Coi(ラオス)

Coi(ラオス語で「私」)は現地の少数民族タイル一族と共に、彼らの伝統的な手仕事に新たなエッセンスを加えた「もの作り」による生産者の収入向上や就労支援、伝統文化の継承を目標に活動しています。

出前講座

各出前講座を行うとともに、開発教育協会(DEAR)のワークショップなどに参加し、講師のスキルアップに努めました。ネパール人が多く住む地域である神奈川区多文化共生ラウンジで、地域の人々にネパールについてのワークショップを行い好評でした。学校等での出前講座の実施件数を増やすことが今後の課題です。

■学校や地域での出前講座

- 鎌倉女学院高等学校(6/15)
- 町田市立真光寺中学校(7/13)
- 神奈川区多文化共生ラウンジ(11/17)
- JICA ライブラリー(11/24)

■講師のスキルアップ

外部での研修参加 d-lab(全国研究集会)(8/3・4)



真光寺中での出前講座の様子

多文化共生の地域づくり

外国籍の人たちが日本で暮らすうえで問題となっている制度の壁や心の壁などを、同じ地域に住む人たちが理解し、彼らの人権が守られ、豊かな文化交流ができる地域社会づくりを目指しています。

■かながわネパール人コミュニティと一緒に

神奈川区多文化共生ラウンジで行われた「ネパールカフェトーク」に、かながわネパール人コミュニティのメンバーおよび地球の木メンバーが参加しました。(9/15)

■「学習会」や「対話カフェ」のプログラム作成

神奈川区多文化共生ラウンジとの話し合いから、地域の人たちにネパールのことを知ってもらうための学習会を開催することになり、出前講座「ネパールってどんな国？」を実施しました。(11/17)

■メールマガジン「Colorful world」を配信

9回(11/16~24)、多文化共生にかかわる様々な団体によるイベントの紹介や参加報告などを発信しました。

■「あーすフェスタかながわ2024」への参加

実行委員や企画委員として参加している「あーすフェスタかながわ2024」が、本郷台の「あーすプラザ」で開催されました。ネパールチームを中心に神奈川区ラウンジのスタッフやネパール人の若者らの参加もあり「ネパールの言葉と文化」をブースで来場者にわかりやすく紹介できました。(11/30,12/1)



あーすフェスタかながわ

奪わない暮らし-日本の森

JVCラオスの提唱する「奪わない暮らし/奪われない暮らし」を受けて、このテーマを基に日本の私たちの暮らしの現状を振り返りながら、開発と共有資源保全森林減少と私たちの暮らしとのつながりを日本国内に向けて発信していきます。

■新治市民の森歩き「森に学ぶ第2回」(10/14)

昨年に引き続き、NPO法人新治里山「わ」を広げる会事務局長古武美保子さんを講師に新治市民の森歩きを行いました。ラオスの森や人々の自然観などについて紹介し、森を歩き、その後日本の里山暮らしなどについても話を伺いました(参加者17名)。

■森の絵本『森の歌がきこえる』(田島征三 作/絵、ルートマニー・インシシエンマイ オブジェ)

地球の木が制作のきっかけとなったこの絵本が7月に偕成社から出版されました。広報に協力すると共に、イベントや出前講座などで読み聞かせやワークショップなどを行いました。

地球市民活動

「グローバル社会の動向とポストSDGsの行方、市民社会の在り方についての示唆をもらうこと」を目的に地球の木講座を実施しました。また地域のイベントに参加した他、森の絵本『森の歌がきこえる』の販売も行いました。

■地球の木講座(3/22)

「カタツムリの知恵と脱成長～豊かさと幸福を問い直す～」

[講師] 中野佳裕さん(立教大学社会デザイン研究科特任准教授)

[会場] 青少年交流・活動支援スペースさくらリビング(参加者22名)

大量生産・大量消費のこれまでの経済成長型のモデルは持続可能ではないと多くの人がすでに気がついています。「脱成長」は景気後退やマイナス成長を意味しているのではなく、生活の質や空気や水など、経済成長が破壊してきた多くのものを回復させ、再生していくことを目指しています。

講師の中野さんは市民社会やコミュニティに関する研究を通じて社会変革につながる「脱成長」論を展開する研究者。「脱成長」は、段階を追って、消費社会の仕組みを議論していくのが大事で、それは地域社会の中で取り組んでいくのが良いでしょうと述べています。私たちがこれからの社会、豊かさを考えていく上でたくさんの示唆をいただきました。

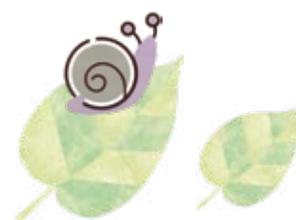


講師の中野佳裕さん

■地域イベント

以下のイベントに参加し、地球の木の活動紹介とクラフト販売を行いました。

- 多文化フェア@なかやま(10/16)
- オルタ館フェスタ(11/1・2)
- かまくら国際交流フェスティバル(11/10)
- 東日本大震災復興まつり(11/23)



広報・政策提言

■ 広報

会報誌や年次報告書、ホームページへの掲載、メールマガジンなどで情報発信を行いました。2024年4月には団体のドメインを変更し、新ホームページをリリースしました。新ホームページではSSLに対応し、活動がよりわかりやすくなるよう構成しました。



■ 政策提言

メコン・ウォッチの声明「海外交通都市開発事業支援機構 (JOIN) はミャンマーの問題事業から責任ある撤退を」や非戦ネットの「政府安全保障能力強化支援 (OSA) への異議申し立ての行動」に賛同しました。

JVCなどが呼びかけ人となっている「ガザの恒常的停戦とパレスチナの和平を求める声明」に賛同、署名呼びかけを行いました。

ネットワーク

地球の木は、以下の団体に参加しています。

● 理事・委員として参加

横浜NGOネットワーク(理事)、かながわ生き生き市民基金(理事、評議員)、キララ賞選考委員会(選考委員)、「南北코리아と日本のともだち展」絵画展実行委員会(実行委員)、あーすフェスタかながわ実行委員会(実行委員・企画委員)、「東日本大震災復興まつり」実行委員会(実行委員)、東日本大震災復興・支援ネットワークかながわ(幹事)、遺贈寄付等相談・市民ネット(運営委員)

● 会員として参加

国際協力NGOセンター(JANIC)、開発教育協会(DEAR)、APLA、メコン・ウォッチ、参加型システム研究所

● その他の参加

NGO非戦ネット

会員数(2025年3月末)549名

正会員..... 131名
サポート会員..... 418名

ボランティア参加者

チーム活動..... 35名 | 事務局サポート 10名
クラフト販売..... 11名 | ラオス図書貼付活動 延べ66名

理事・監事・顧問(2024年度)

理 事			監 事		顧 問	
磯野昌子(理事長)	勝田文隆	乳井京子	飯田信子	清水俊弘	山西優二	
田中浩平(副理事長)	サブコタ・ドルラズ	沼田由美子	菅沼彰宏	丸谷士都子	横川芳江	
大嶋朝香(事務局長)	中野真理子	山田孝志	竹内剛史			

地球の木は皆さまからのご寄付に支えられています

2024年も地球の木をご支援いただきましてありがとうございました。多くの方からの温かいお力添えで、地球の木の活動を支えていただきました。改めて感謝申し上げます。これからも人が人らしくあたりまえに生きていくために、互いに助け合う社会を目指し、海外と日本で活動を続けてまいります。引き続きのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

● ご寄付 ●

① 郵便振替の場合

口座番号:00260-5-14129

② 銀行振り込みの場合

● 横浜銀行 新横浜支店 普通1399575

● みずほ銀行 横浜中央支店 普通1042023

① ②ともに

口座名義は「特定非営利活動法人 地球の木」です。

③ クレジットカード

<https://ngo-earthtree.org/don-method/#creditcard>

地球の木ウェブサイトからクレジットカード(VISA/Master/JCB)

で決済できます。

QR コードから決済ページにアクセスできます。

活動全般へのご寄付のほか、特定の活動を指定してご寄付いただくこともできます。

— 2024年度寄付報告 —

【寄付】191名の個人・団体の皆さまから、**2,269,076円**のご寄付をいただきました。

ネパール.....581,500円

ラオス(森と暮らし).....82,500円

ラオス(図書).....226,400円

ネパール水害.....465,536円

指定なし.....913,140円

【物品での寄付】210名の皆さまから、**1,105,090円相当**(額面金額)のご寄付をいただきました。



● 遺贈のお願い ●

ご自身が築き上げてこられた大切な財産の一部を、また、地球の木をご支援いただいていた故人が遺された財産の一部を、地球の木にご寄付いただくことで、思いを未来に受け継ぐことができます。地球の木への寄付には、一定の条件下で相続税がかかりません。活動に関する疑問やご寄付の使い道に関するご質問、ご希望など、まずはお気軽にご相談ください。

地球の木は生活クラブ生協運動グループでつくっている「遺贈寄付等相談・市民ネット」に参加しています。ここでは、司法書士や税理士、公認会計士などの専門家にご相談いただくことができます。

● いらなくなった切手やはがき、テレホンカード、外貨紙幣、貴金属などはありませんか？地球の木にお送りください！

品目など、詳しくは裏表紙の「もったいないを掘り起こそう」をご覧ください。



地球の木は認定NPO法人※です

地球の木へのご寄付は所得税や相続税などの寄付金控除の対象となります。

※認定NPO法人とは、NPO法人のうち、「公共性」、「公益性」、「健全性」、「透明性」について、一定の基準を満たしていると認められた法人です。

地球の木では会員・ボランティアを募集しています

地球の木は、会員の皆さまのサポート、市民のボランタリーな参加により、運営されています。
会員、ボランティアの皆さまから多大なご支援、ご協力を賜っておりますことに、
心より感謝申し上げます。

会 員

—年会費—

- 正会員.....6,000円
- サポート会員.....6,000円
- 団体会員.....一口10,000円

※正会員は総会の議決権があります。
※学生は、正会員・サポート会員とも、年会費3,000円です。
入会について、詳しくはホームページをご覧ください。

ボランティア

地球の木の各事業は、ボランティアチームによって運営されています。各事業チームへの参加をはじめ、事務作業の補助、寄付品の整理、広報物の発送などにご協力いただくボランティアを募集しております。

また、広報物の作成など、プロボノの皆さまのご協力もお待ちしております。

ボランティアについて、お気軽に地球の木事務局にお問い合わせください。

もったいないを掘り起こそう



切手、はがき、貴金属などをご寄付ください!

おうちの中で眠っている書き損じはがき、未使用切手、金券、貴金属などを地球の木にお送りください。国際協力に役立っています。



ギフト券・商品券
図書券・図書カード



QUOカード
未使用テレフォンカード



書き損じ
未使用はがき



未使用切手



金、プラチナ、銀のアクセサリ、
腕時計など。片方だけのもの、
壊れたものでもOKです!



特定非営利活動法人

地球の木

地球の木は1991年に設立され、ラオス・フィリピン・カンボジア・ネパールで社会的に困難な状況にある人々への支援を行ってきた市民活動団体です。国内では、地域や学校での出前講座などの社会教育活動を行っています。

地球の木2024年度年次報告書

- 発行 特定非営利活動法人 地球の木
〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3 フェニックス関内2F
TEL 045-228-1575/FAX 045-228-1578
E-Mail office@ngo-earthtree.org
ホームページ <https://ngo-earthtree.org/>
Facebook <http://www.facebook.com/chikyunoki>
- 発行責任者 大嶋朝香 ■編集 会報作成チーム・事務局
- 発行日 2025年9月30日

